

鍛・東廣・追想譜

本誌同人 内田 三千三

皇紀二六〇〇年の極月、愉快として二人の淨瑠璃人が他界した。文樂の鍛大夫と女義東廣がそれである。

○
鍛大夫の藝歴に就て、私は殆ど無智であると、斷言したい程舞臺的な最近の足跡しか知らない。にも拘はらず、彼の死は、一脈の寂愁を與へられた。

卒直に放言して、鍛大夫は遂々二流の藝術家で終つた。未來の紋下を胸に描きつつ

終生、大序級の大夫で藝術的生涯を了へる、

悲運な幾多の大夫に比ぶれば、さのみ不幸だとは云へないが一流の藝術家として晩年を飾つて、瞑目したかつたであらうことが充分推察出来る。

巨星古靱大夫と俱に鍛は文樂中東京出身の大夫として餘りにも著名である。しかし古靱の藝格が適正深遠で、どこか東京人を聯想させる。カツキリした藝律を持つてゐるのに比較して鍛の持つ藝術的色調は、清澄な幽玄性がなく、或る意味で大阪色を反影するモツタリと沈澱した艷雜性を晩年の彼は持つてゐた。

この人の出生が東京だと云ふことを「不思議」からせる程善惡兩様の意味で大阪的色彩を身につけた大夫であつた。この大夫程語り物によつて良惡の激しい人も珍らしいと思ふ。

古靱と共に嘗つて邦樂座にて素淨瑠璃で東上した時語つた「酒屋」など凡そ劣惡で世評に高い艷物語りと云ふ定説を疑ふ程自我流の多い芝居氣たつぶりの枝臭紛々たる演出であつたと同時に數年前、歌舞伎座へ文樂が引越興行した時演つた白石噺の「雷門」の、どじよう坊の樂しめる巧さと。東劇で聞いた「桂川」の六角堂の巧妙さは今猶耳底に残つてゐる。

土佐大夫が惜しまれつつ引退した後、鍛は駒大夫と共に、文樂の世話語りとして第一線に立つかと秘かに待望させるものがあつたが、丁度新派で巧い役者として定評のある小堀が師伊井峯峰を失つてから躍進せず、永久の脇役として、終らうとしつつある藝相と共通する佗しさを感じさせてゐた。

小堀の技力は後退せず圓熟化してゐるが鍛は無慘にも艷聲をむしばまれ、崩衰して行く悲哀を激しく露呈しつつ凋落して來た。

全盛期の鍛を知らない私だが朝退夕凋の彼を聽いて、うす暗い失望感が次第に加重されて來た。

鍛大夫永眠の訃報を肌寒い師走の路上で見た夕刊で知つた夜、私はふとチャチな淺草の劍劇々場で彼が隆盛期に吹込んだ朝顔を宿屋から大井川へかけて下座用の伴奏としてレコー

ドで聞いた。

その朝顔は混濁した晩年の凋落藝とは遙かに違つて、艶麗な滋味と甘美な情韻が籠つてゐた。殊に宿屋の段切れ「杖を力に降る雨も」……はレコード乍ら巧い喃！と思つた。

冷々と降りしきる秋雨に盲眼を打たせて、夫を慕ふ一念によろめき乍ら、ひた走る哀婉な深雪の姿を眼底に映出させる甘美な哀韻と緻密な息使ひを感じさせた。

現に觸れ心の眞線を適打する深鋭な演出ではないが情感の液を巧緻にかき立てて哀愁の世界を醸出する甘美さがあつた雷門、六角堂、と共にレコードの朝顔は私にとつて一生を刻む鍛の印象となるであらう。

○

女義東廣の忽然たる死は様々の感慨を與へられた。彼女の死の直前東京の淨瑠璃界は野澤桑造、鶴澤寛三郎の二人が相次いで物故した。

暇ある毎に、素戔の人々を聴かせて貰つてゐた私などは、二氏の死に由りて激しい無常感にさへ打たれた。

鍛大夫への追想が未だ乾く暇なき時、東廣の死が報導された。東廣の貧しい一ファンであつた私は、人一倍苦い落膽を味つた、生前東廣の持つてゐた藝線の逞ましさは、女義として稀に見る傑出した力の淨瑠璃を生んだ、一見無器用であり乍ら、鍛鍊された無技巧の妙境を持つ藝格は太い線、逞まし

い氣魄、充満した力が、渾然と迫つて。語るよりも唄ふ淨瑠璃の多い一部の男の大夫を睥睨して卓拔な藝貌を最後まで展開させた。

藝の爲め一生を果敢に捧げ盡した東廣は、大阪の生んだ偉大なる女義である。

私は少年時代、震災前の有樂座の名人會で彼女を始めて聞いた記憶がハツキリ残つてゐる。艶聲美貌の呂昇と俱に上京して、呂昇は主に巧緻繊細な艶物を東廣は主として遊い時代物を出し物にしてゐた。

始めて聞いた晩の赤垣出立などは、鬼を欺く氣魄とひた向きな藝力に壓倒されて思はず小供心にも女子力士の如き東廣の風貌を凝視したことを今だに覚えてゐる。荒削りだが眞正直に作魂を逞ましく鋭描して行く迫力は群を抜いてゐた。

震災後は珍らしく小仙、團司等と俱に演舞場に素淨瑠璃で出演した時の「沼津」が一番印象に深い、この人の「沼津」は軍兵衛が如何にも「武士も及ばぬ丈夫」の魂を持つ性格を壯烈に堀り下げて表現する。

「金のやり度い屈托に」でじつくり迫る悲愁など街ひの無い眞藝で充分頷づかせる。

それと「云ふまではないけれど」の邊りを情味深くじんわり演つて「心に一物荷物は先へ」……で屈托のある別愁を渾然と腹で抽出する藝腕がたまらなく浮えてゐた。

その翌月、故仁左衛門の平作で重兵衛を演る吉右衛門が偶然機敷に來て熟聴してゐた姿と重厚な澁さを持つ東廣の熱演が今猶腦裡に残つてゐる。

巨怪な大力士が年とともに消えて行く様に堂々眞正面から淨瑠璃とガツチリ取組む底力のある東廣の如き藝脈は、これからの女義には到底求められなくなるのであらう。噫

南方松若氏に反對

本誌同人 岡田 蝶花 形

貴文淨瑠璃新體制を讀みました、誠に結構な御意見ですがその中只一ヶ所、三百九十六號十三頁の終り頃から十四頁へかけての御意見『褒める方はいくら褒めてもよいが批評を無暗と露骨に書く事は最早先の永からぬ人に只侮辱を與へる計りであつて何等藝術的向上に効果はなく、新體制の精神にも悖る行爲である』の件はその考こそ舊體制の權化である事を御自身氣がつかれないのであるまいかと思ひ、その意見だけは私としては絶對に反對だと申上げる。

それぢやお前が最早先の永からぬ人を悪く書いたからいふのか又書きたいからそんな事ぬかすのかなどといやに殺氣立つて來られるかも知れぬが、そんな氣は毛頭ない事をお斷り

する、又褒めたから喜んで居たの、悪く書いたから怒つて居たの等そんな内幕は一切知らない、又よく書いたから自分の懷中が肥つたなどの商賣では勿論ない。つまり批評は書くがそれで生活をしてゐるのではない。私の生活はチャンと醫師法といふ法律の下に大正六年十一月に登録番號を受けてゐる天下に隠れもない醫者であるから御心配無用、只近頃私の交際してゐる義大夫を語るのがあまりにも上手な人とか、一流の義大夫好みの紳士とかいふ人が貴下と同じ様な論を發するにあきれて物が言へなくなつてゐる矢先、貴文を見たから書きたくなつたまでである、即世間一般は貴意見と同様であるから何も貴論へのみ反對といふつもりはない、世間への反對に書くのである。それぢやお前の論を先に書けといふなら、曰く「藝術向上に効果のあるのは褒める事は一切書かず、先が短からうが、永からうが、悪いと思ふ事は遠慮なしにドシドシ批評する、それが書く人に充分の経験があらうがなからうが何方でもよい、どんな科學的揚足取りでも何でもよい、思つた事はドシドシ發表する事が多少なりその人の刺戟となるのでこれこそ望ましい所である、只その時藝以外の人身攻撃は絶對にいけない、はじめて義大夫を聽いて何等の経験のない人の意見などはもつとも聽いてみたいところである。」以上の如くしてそしてその爲にもしその藝術家の評判が悪くなるやうなら、紙上に書くなくても人の口にはそれを甲か